石鎚村の墓直し

『墓と葬送の社会史』などの著書があり、法学者でありながら「お墓の先生」で通っている森謙二さんを、愛媛大学へ招待したことがあった。その時森さんは、「石鎚村へはどう行くのか、是非そこで『墓直し』について調査したい」と、強く希望した。調べてみると、石鎚村は旧村名で、古くは千足山（せんぞくやま）村といった。現在は周桑郡小松町の一部となっている。この時は、台風が接近していたため行くことがかなわなかった。

その後竹内康博さんが愛大に赴任してきた。彼も、自他ともに許す墓地の法律問題の専門家である。「墓直し」の話をすると、是非調べてみたいと言う。さらに幸いなことに、小松町清楽寺住職の大久保明順さんの協力をえることができた。大久保さんから、「墓直し」のことを知っていそうな人が見つかった、という連絡があった。明順さんは体調不良とのことで、二〇〇〇年の一月、私たちは息子さんの車で現地へ向かった。

まず二、三人に話を聞いたが、「墓直し」に関する話は、全部異なっていた。

最後に、現在では一軒だけとなった旧村地区に奥さんとふたりで住んでいるという曽我部正喜さんに連絡をつけた。お宅へ行き着くには、車を降りて三〇分ほど山道を登らねばならないという。躊躇していると、正喜さんのほうから降りて来て下さることになった。

正喜さんによると、村内で人が亡くなると、一日目通夜、二日目葬式のあと埋葬するのだが、当日は土盛りだけして帰る。そして翌日、再び埋葬した場所に来て、土盛りの周囲に河原の石を置いて場所を明確にする、これを「墓直し」と称するという。河原の石を使うのは付近の石と区別するためであり、「墓直し」の「直す」は整えると言う意味だそうだ。正喜さん宅では九六年にお母さんが亡くなり、この時も「墓直し」を行った。ひょっとしたらこれが最後の「墓直し」となるか、と語っておられた。

見上げると山はすでに真っ暗になっていた。「これから帰る」という正喜さんと別れ、私たちは車に乗って、下界を目指した。